

パリ リサイクルモード

フリージャーナリスト ^{すず き はる え} 鈴木 春恵

9月のパリというのは、物事の始まりの季節。日本でいえばちょうど4月のように、学校の新年度がスタートする月でもあるし、長い長いヴァカンスシーズンのあとで、人々が街に戻り、さまざまな活動が再開される時期でもある。そんな新しい始まりの空気というのは、たとえばブティックやギャラリーなどのさまざまな案内状が舞い込むことでも感じられる。それは新製品の発表を記念してのカクテルパーティーだったり、あたらしいコンセプトのお披露目イベントだったり。気の早いものになると、もうクリスマスシーズン



'merci' 店内

の趣向を知らせてくるものもある。そんななか、あるインヴィテーションカードに、「おや…」と思った。それは、パリのなかでも流行の発信地と目される北マレ地区にあるコンセプトショップ「merci (メルシー)」からのもの。いかにも再生紙という色と風合いを感じさせるカードに「UPCYCLING」の文字がくっきりと印刷されている。アップサイクリング。ドイツ人Reiner Pilzが1994年にはじめてつけた言葉で、2002年に刊行されたWilliam McDonoughの本「Remaking the Way We Make Thing」でポピュラーになったというくだけから始まる文が添えられている。つまりは、リサイクルやエコロジーなどのさまざまな意味をふまえたうえで、さらに元のものよりも美しいものを生み出すというコンセプトで作られた品々を集めたエキスポジションの案内状というわけなのだった。モードの情報に敏感な方は「merci」の存在をすでにご存じだろう。1年半ほどの前にオープンしたこのショップは、パリの流行を語る上でははずせないといわれる場所。流行といっても、それはデザイナー



プラスチックボトルから作った照明アート
'merci' にて

ズブランドの洋服などに限った狭義のものではない。この店が扱っているのは、着るものをはじめとして、雑貨、台所用品、家具や文房具までと幅広く、新品に限らず、アンティークなども含めた形でさまざまなアイテムがセレクトされている。しかも、一つひとつの物そのもののおしゃれさ加減もさることながら、大きな天窓から光が入る広々とした店内のディスプレイや雰囲気もまた格別。さらに季節ごとにテーマを変えて展開するイベントがまたトレンドいで、9月のそれが、「アップサイクリング」というものだった。

では、実際に何が展示されていたかということ、古いタイヤから作ったライダー用のヘルメット、プラスチックボトルを花型にカットして、それを組み合わせた照明装飾など。それらのアイテムは、言われなければリサイクルとはわからないく

らいに、製品としての完成度が高く、ショップのネームバリューも手伝って、お値段のほうも立派なものだが、この店をごひいきにするような内外のお客さんの中には、喜んで飛びつく人も少なくないはずだ。

「こんなものもあるわよ」

一緒に行った友人が手に取っているのは、カラフルなビニル袋を原料にしたシンプルなコサージュ。それは、日本人のわたしからすると、運動会や学芸会などの飾りにちり紙などでこしらえた花飾りを彷彿とさせるようでもあり、即座に肯定的な反応ができなかったけれども、友人は自分の黒いジャケットの衿元に添えて、

「悪くないんじゃない？」

と、まんざらでもなさそう。その様子を見てみると、おしゃれというのは、要は活かし方の問題なのかな、という気になってくる。ぜいたくなものを身につけるばかりがいまどきのおしゃれなのではなく、物の背



かごを頭にかぶっておどける子どもたち 'merci' にて

景にある意図も含めた形で、しかもちょっとばかり粋なことをしているという気分こそが大事なかもしれない。

リサイクルのおしゃれということでもうひとつ。「ma garderobe (マ・ギャルドローブ)」という子供服のブランドが、朝のテレビでモードのニュースとして取り上げられていた。こちらは、パリに暮らすふたりの女性が2年ほど前に立ち上げたもので、オリジナルの子供服はすべて、さまざまな布をリサイクル利用して作られている。いまのところ、常設の店舗はなく、インターネット上での販売などが主だが、市内中心部のギャラリーで秋冬もののコレクションを発表するというので、その機会にお二人に会うことにした。

ふくよかな黒髪に朱色の口紅がよく映えるアンドレアさんはチリの出身。一方、プラチナにも近いプロ

ンドヘアのマリアヌさんはノルウェー人。ブランドのいかにもパリっっぽい雰囲気作風から、わたしはてっきりフランス女性を想像していたのだが、意外なことに2人ともが外国人。とはいえ、それぞれ20年と16年の「パリジェンヌ」としてのキャリアの持ち主である。

子どものころから洋服を縫ったりするのが好きで、10代ですでに、小さなアトリエを構えて自作ブランドのコレクションを手がけたりしたあと、「冒険心から」フランスにやってきたというアンドレアさん。23歳のときだった。そして、運輸、環境、浄水などにまつわる海外援助団体に籍を置いて仕事をした。

「ほんとうに幸いなことに、わたしのいままでの人生では、面白いことばかりに巡り合ってきた」と、その仕事もまた興味深く、やりがいのあるものではあったものの、40歳を機



冬物コレクションの舞台はパリ中心部のギャラリー



アンドレアさん



マリアヌさん

に、ふたたびモードの世界の仕事がしたくて、思い切った方向転換をすることに。すでに手に覚えはあったものの、あらためて洋服のパターンや、モード全般について学ぶことに決め、その場所で、マリアヌさんと出会って意気投合したのだという。

では、そのマリアヌさんはというと、マーケティングやコミュニケーション部門の管理職として、ノルウェー、スウェーデン、フランスの企業で働いた経歴の持ち主。そういったキャリアウーマンという生き方の一方で、3人の子の母でもあり、やはり子どものときからお裁縫が好きというところは、アンドレアさんと共通している。

「育児休暇中にね、姪へのプレゼントとして、ジーンズを解体してワンピースを作ってあげたの。それがきっかになって、次々とリサイクルの布で子どもの服を作って、それは本にもなったのよ」と、いかにもしゃきしゃきと、公私ともに充実した毎日を送ってきた人らしく、やや早口でマリアヌさんは話す。その本にもこめられた、クリエーションの素晴らしさと、いつもいつも消費社会にばかり貢献すべきではないという思いはさらに膨らんで、このパッションそのものを日々の仕事として生きることに決めたのだという。

彼女たちの洋服づくりはまず、布探しから始まる。フリーマーケット、

RECYCLE FASHION-1

紳士物のシャツを使ったボンチョ



RECYCLE FASHION-2

紳士物のパンタロンとレースの組み合わせ



RECYCLE FASHION-3



赤十字、また、カトリックのピエール神父が創設した慈善団体「エマウス」などに持ち込まれた衣類やカーテン、リネン類がその対象。「週末のたびに、夫とパリのあちこちのフリーマーケットに行っているわ。たとえば、男性のパンタロンなんかは、だいたいポケットのあたりが傷んでしまって着られなくなるけれども、わたしたちとしては、ほかの部分は十分に使える。ウールの質なんか、上等なものが多いわね。」と、アンドレアさん。また、彼女らの活動を

知って、不要になった衣類や家の中の布を持ってきてくれる人もいます。という。「テレビで紹介されてからは、遠方の方からもコンタクトがあるようになったわ。いただけるといふ布はほとんど受け取るけれど、使わないものは、赤十字などに寄付するというのを承諾していただいているの。たとえば、ポリエステルとか化繊をほとんどわたしたちは使いません。子どもの肌に触れるものだから、天然繊維にこだわりたいの」

布はすべて自分たちで洗ってほしく。そしてそれをどんなふうに使えるか、2人で相談しながら、ふりわけてカットし、たいていの場合は、ひとつのモデルに数種類の布を組み合わせて形にしてゆく。それらはすべて2人の手仕事によるものだから、当初は、ワンシーズンに200着を作るのがやっとだった。けれども、今シーズンのコレクションは全部で410着。つまり倍の生産量になったわけだが、その理由は、縫製の段階をマダガスカルのアソシエーションに依頼するようになったせいだという。そのアソシエーションというのは、現地の恵まれない環境にある女性たちが参加することができ、そこで縫製の仕事をするかたわら、連れて来た子どもたちを、遊ばせ、食べさせることが可能というというもの。定期的な収入を得ることができるというのは、現地の子どもをもつ女性



デンマークの高級ホテルのファブリックが素材になったもの

らにとっては大きな魅力である。

この話を聞いて、わたしは最初にご紹介した「merci」のことが浮かんだ。というのも、ショップ設立コンセプトの大事な要素として、売上金の一部をマダガスカルの慈善事業に寄付するということが謳われているのを思い出したのである。そのことを話題にすると、アンドレアさん、マリアヌスさんももちろん、すでにご存じとのこと。多くの人の興味を刺激し、共感を呼ぶ試みにはこのようにヒューマンな意思が通底しているものなのかもしれない。

「結局のところ、今の時代のモードは、長期的な視野をもった開発とか、エコロジーの発想がそこになくと成り立たないのではないかしら」とは、マリアヌスさんの弁。「わたしたちが巡りあう中には、ほんとうに見事な布もあります。もうこれから先は手に入らないような。そういうものを活かさなければ」。

実際、ギャラリーに並んだ子供服を手に取れば、それらはどれも可愛らしい。「これはオスロの4つ星ホテルのカーテン地を使ったもの。こっちはベッドカバーだったものよ」

なるほど、優雅な客室を飾っていたであろう、なんともいい色合いの蔓草模様のコットンは、ワンピースの胸元やフードの内側に使われて、かなりおしゃれなアクセントになっており、手の込んだキルティングのマチエールは、コート素材にはぴったりである。そして、ピンクのボタンのあしらいがなんとも言えず可愛らしく気が利いている小さなカーキ色の上着を手に取ると、「あ、それはね、夫の兵役時代のコートだったのよ」と、アンドレアさんがひときわ明るい声で反応した。「それにね、裏地はマリアンヌのおばさんの家のカーテン」。白地にキッチュな花模様が踊っている。「こんなふうだね、布にはそれぞれのヒストリーがあるのよ」



アンドレアさんのご主人の兵役時代のレインコートがこのとおり

彼女たちが作る子供服に感じる温かみ。それは、愛情をこめた手作りという上に、そんなヒストリーの深みというものも加味されているのかもしれない。手に取った人が思わず微笑みたくなるような服たち。それらはいずれも一点一点丁寧に作られたもの。それだけに、お値段は量販店の子ども服などと比べれば、高価なことはたしかだ。だから、求める人もまた、環境問題について敏感で、しかも比較的裕福な人というのが始まりだったようで、ファッショナブルなママや、シックないでたちのマダムが孫娘のためにと買っていった。けれども、最近では、若いお客さんも増えたという。そして、必ずと言っていいほど、リピーターになってくれるという。

カードのデザインやネットに載せる写真も自前、モデルはマリアンヌさんの娘たちという現代風家内制手工業。キャリアウーマンの時代と比較しても、かつてないほど働いて、しかもかつてないほど稼げていないという冗談を高らかに笑い飛ばせるふたり。そして、「今がほんとうに充実している」と言い切れる強さをまぶしく眺めた。

鈴木 春恵 PROFILE

1966年福島県生まれ。筑波大学卒業後、百貨店を経て出版社に勤務。きもの雑誌の編集に携わる。98年からパリ在住。フリーランスのジャーナリストとして活動している。